

香道秋農光中

中古組香十品

○花軍香(はないくさこう) 志野宗信これを組む

香三種

一種「梅」と名付け 五包

一種「桜」と名付け 五包

右の内一包づつ試に出す。

一種「山嵐(やまおろし)」と名付け 一包

右は試なし 客香なり。

右試終りて出香九包なり。打ちませ焼(たき)出すべし。先づ、始めに一包「花合」と名付け焼く。一炷びらきにて記録す。残り八包は二炷びらきにて記録し、盤上の人形をつかう。点は残らず聞き終りてかくべし。一人間は二点、二人よりは一点、当らざるは一人は星二つ、二人よりは星一つ。「山嵐」壺人聞くは点三つ、二人よりは点二つ、当らざるは星一つなり。記録には、「梅方」、「桜方」と立ち

わかれ、「梅方の点星何程(なにほど)」「桜方の点星何程」と都合引き合せ「何程何程の勝」と書付ける。ただし、双方の点星同数の時は、「山嵐」の点多き方を勝とす。
右のごとくにして盤立物な(無)しにも
花軍香と名付けて聞くなり。
盤は、豎溝五筋、横の界(けい)十五間、梅方
大将「玄宗」、桜方大将「貴妃」。外に「官女」

右試終りて出香九包なり。打ちませ焼(たき)出すべし。

先づ、始めに一包「花合」と名付け焼く。一炷びらきにて

記録す。残り八包は二炷びらきにて記録し、

盤上の人形をつかう。点は残らず聞き終りて

かくべし。一人間は二点、二人よりは一点、当ら

ざるは一人は星二つ、二人よりは星一つ。「山嵐」

壺人聞くは点三つ、二人よりは点二つ、当らざる

は星一つなり。記録には、「梅方」、「桜方」と立ち

わかれ、「梅方の点星何程(なにほど)」「桜方の点星

何程」と都合引き合せ「何程何程の勝」と書

付ける。ただし、双方の点星同数の時は、「山

嵐」の点多き方を勝とす。

右のごとくにして盤立物な(無)しにも

花軍香と名付けて聞くなり。

盤は、豎溝五筋、横の界(けい)十五間、梅方

大将「玄宗」、桜方大将「貴妃」。外に「官女」

人形ハツ

人形香一炷、燵は一間進み、聞かざる
 人の人形ハ、其俣をかり
 始「花合」の時、「山風」を聞くは二間
 進む。一人聞きは三間すすむ。
 次より二炷びらき「山風」一人聞きは
 三間、二人よりは二間つつなり。
 相手二炷ながら聞き、一方一炷も聞かざる

四、持ちたる花を取、相手の人形の腰
 次より燵は、燵を燵を燵と燵
 二炷の内、一炷当れば花はかえさず、一
 間進むばかりなり。
 「梅」「桜」の香も一人聞なれば二間進む。
 二人よりは一間つつ進むべし。
 「山風」の当りと、又次一炷の当り有る

人形ハツ

人形、香一炷聞けば一間進み、聞かざる
 人の人形は、其のまま置くなり。
 始め「花合」の時、「山風」を聞くは二間
 進む。一人聞きは三間すすむ。
 次より二炷びらき「山風」一人聞きは
 三間、二人よりは二間つつなり。
 相手二炷ながら聞き、一方一炷も聞かざる

時は、持ちたる花を取り、相手の人形の腰
 にさす。
 次に聞けば取られたる花を取りかえす。しかし、
 二炷の内、一炷当れば花はかえさず、一
 間進むばかりなり。
 「梅」「桜」の香も一人聞なれば二間進む。
 二人よりは一間つつ進むべし。
 「山風」の当りと、又次一炷の当り有る

了相手一炷も當らざれば持ちたる花
 を取れど一問退く
 山風の當りに今一炷當らざるに
 梅を梅の中(うち)一炷當れば花を持ち
 ながら一問退くなり
 山風、双方聞く一方は、今一炷の「桜」か
 「梅」かを聞く、相手は「山風」ばかりにて一
 炷は聞かざる時は二問進む。一方、二炷な

くらや一方の二問をひたし
 記録の点の右にかけ「星」は左に付くるなり
 此の香は宗信より参雨斎(さんうさい)へ伝えられ
 香かんとせりや
 花軍香之記 香組
 梅 山風
 桜 山風
 山雨 山風
 山雨 山風
 梅 山風
 梅 山風
 梅 山風
 梅 山風

に相手一炷も当らざれば持ちたる花

を取り、あとへ一問退く。

「山風」の当りに今一炷當らざるに、

相手、「梅」、「桜」の中(うち)一炷當れば花を持ち

ながら一問退くなり。

「山風」、双方聞く一方は、今一炷の「桜」か

「梅」かを聞く、相手は「山風」ばかりにて一

炷は聞かざる時は二問進む。一方、二炷な

がら聞きし方は三問進むべし。

記録の「点」は右にかけ、「星」は左に付くるなり。

此の香は宗信より参雨斎(さんうさい)へ伝えられ

し香なりとかや。

「花軍香之記」

梅方 点十二膳

早梅樹 山鹿梅樹 梅樹 梅樹 梅樹 皆
 縮木梅 山鹿梅樹 梅樹 梅樹 梅樹 皆
 青竹樹 梅樹 梅樹 梅樹 梅樹 皆
 梅方 星四頁
 紅紫樹 山鹿梅樹 梅樹 梅樹 梅樹 皆
 白菊 山鹿梅樹 梅樹 梅樹 梅樹 皆
 玉桂樹 山鹿梅樹 梅樹 梅樹 梅樹 皆

年号月日

古今香

香二種也
 一種を鶯と名付五包
 一種を蛙と名付五包
 右の内一包は試し物と
 又香一種 歌と名付二包
 太い試し物
 以上十包出香なり歌は香二種初めより

古今香(こきんこう)

香二種なり

一種「鶯」と名付け 五包
 一種「蛙(かわず)」と名付け 五包
 右の内一包は試し物に出す
 また香一種
 「歌」と名付け 二包
 右は試し物なし

以上十包出香なり。歌の香二種、初めより

二包結び合せ置きて、残り八炷も、「鶯」と
 鶯と二つ結び合せ、蛙と蛙と結び合せ、「鶯」と
 蛙と結び合せ、蛙と鶯と結び合せ、
 多々其後打ちまぜて焼物とす。二種い
 きに、れ打べし、れ乃打す。
 歌と歌は 「歌」の札打つべし
 鶯と鶯は 「鶯」の札打つべし
 蛙と蛙は 「蛙」の札打つべし

先蛙、後鶯は 「水」の札打つべし
 先鶯、後蛙は 「花」の札打つべし
 右、歌の香は客にて二点なり。記録は当
 りばかりをしるす。
 札は、一人前五枚、「鶯」、「蛙」、「水」、「花」、「歌」此の
 字を書くべし。札の表、『古今集』の中の
 歌人の名を書くべし。
 在原業平 伊勢大輔 凡河内躬恒

在原元方 藤原敏行 柿本人丸

僧正遍照 小野小町 此類なり

異説に、歌の香は二色の香を一種づつ包む。試なしの香二色出るは、是を「歌」の香と心得て札を打つべしともいえり。

古今香之記 香俚

梅香 蛙 柳霞 秋 白菊

号 蛙 号 号 蛙

元方 秋 秋 秋 秋 秋 秋

大脚 秋 秋 秋 秋 秋 秋

人丸 秋 秋 秋 秋 秋 秋

○呉越香

香四種なり 一四包 二四包 三四包

右の内一包包つ試し出せ

在原元方 藤原敏行 柿本人丸
僧正遍照 小野小町 此の類なり。

異説に、歌の香は二色の香を一種づつ包む。試なしの香二色出るは、是を「歌」の香と心得て札を打つべしともいえり。

「古今香之記」

○呉越香(こえつこう)

香四種なり

「一」四包 「二」四包 「三」四包

右の内一包包つ試に出す

客一包試かし

右試三炷終りて、残十包打ちまぜ焚き出さず。一炷びらきなり。連中、「呉方」越方」と双方わかれ聞くべし。聞き当る人の人形を一間づつ進め、当らざる方は馬よりおろす。次に一炷当分は馬にの(乗)すべし。其の所は動かさず。また初めにすすみたる方も後に当らざるは馬よりおろす。多少にかまわず「客」の香

あはれ二間とくじ馬よりありたるも客あはれ、馬にのりて一間すすむ。人形退く事はなし。大將は「団扇」を持ち、大將早く一分捕場(ぶんどりば)にいたりたる方を「勝」とす。負けたる方は、何れも下馬して勝ちたる方へ旗を渡す。持ちたる道具も抜きて渡すべし。それより後は、香終わらずとも盤の勝負は事終わるなり。盤の溝五筋、豎の目十間

「客」一包試なし

右、試み三炷終りて、残十包打ちまぜ焚き出す。一炷びらきなり。連中、「呉方」「越方」と双方わかれ聞くべし。聞き当る人の人形を一間づつ進め、当らざる方は馬よりおろす。次に一炷当分は馬にの(乗)すべし。其の所は動かさず。また初めにすすみたる方も後に当らざるは馬よりおろす。多少にかまわず「客」の香

当れば二間すすむ。馬よりおりたるも客あたれば、馬にのりて一間すすむ。人形退く事はなし。大將は「団扇」を持ち、大將早く一分捕場(ぶんどりば)にいたりたる方を「勝」とす。負けたる方は、何れも下馬して勝ちたる方へ旗を渡す。持ちたる道具も抜きて渡すべし。それより後は、香終わらずとも盤の勝負は事終わるなり。盤の溝五筋、豎の目十間

かり五間目の居小を捕場とらひ廣くをく
 かりとわせあき穴をわあき分捕場わけとらひ一つ
 前後ぜんごは五つづつ以上十一穴なりあき圖ずに
 委まかし記録きこくはありありり点てんをかくかくへし

一 夏ふ
 二 柳風
 三 村雨
 四 密落雲
 吳越香之記 香俱
 一 三 三 二 二 一 一 一 二 二

吳方廿一巨

若松わかまつ 一 二 三 二 三 一 一 一 二 二 皆
 緑竹りよくちく 一 二 三 二 一 二 一 三 二 六
 赤楊せきやう 二 三 二 三 三 一 二 一 一 三
 越方十巨負了
 白梅はくばい 一 二 三 二 一 一 一 二 三 四
 白糸はくいと 二 一 三 一 一 二 二 三 三 一
 玉桂ぎよくい 一 二 三 一 一 一 一 一 三 四

なり。五間目の間に「分捕場」広くおく
 なり。あぜ(畦)に穴をあく(開)る。分捕場に一つ、
 前後に五つづつ、以上十一穴なり。図に
 委し。記録は当りばかり点をかく(掛)べし。

「吳越香之記」

年号月日

右、人形装束は「呉」「越」別の色に作るべし。
左右いづれを「呉方」「いづれを「越方」という
定法なし。時の興に随う。

○三夕香

香三種也

榎立山(まきたたつやま)と名付け二包
鴨立沢(しぎたつさわ)と名付け二包
右の内一包包つ試に出す

浦の苦屋(うらのとまや)と名付け 五包
右は試なし 客なり

右試かり客なり

右、試み終りて残る三包打ちませ焚き出だすべし。
記録、当りに一点、客は二点たるべし。
(但し、一炷ばかり聞くといい説あり。
非なり。勝(かつ)て故なき事なり)

三夕香之記

香位
榎立山 五香
鴨立沢 子の目
浦の苦屋 五香

香三種なり

○三夕香(さんせきこう)

右、人形装束は「呉」「越」別の色に作るべし。
左右いづれを「呉方」「いづれを「越方」という
定法なし。時の興に随う。

「榎立山(まきたたつやま)」と名付け二包

「鴨立沢(しぎたつさわ)」と名付け二包

右の内一包包つ試に出す

「浦の苦屋(うらのとまや)」と名付け 五包

右は試なし 客なり

右、試み終りて残る三包打ちませ焚き出だすべし。

記録、当りに一点、客は二点たるべし。

(但し、一炷ばかり聞くといい説あり。

非なり。勝(かつ)て故なき事なり)

「三夕香之記」

明立込	浦苔包	桔立込
明立込	浦苔包	桔立込
浦苔包	明立込	桔立込
明立込	桔立込	浦苔包

右の香ハ三炷方より、又終りて包紙をひらき記録すべし。札なし。名乗紙を用いて、聞くべし。「三夕の和歌」を以て組し香なり。本歌、

世に多くし(知)る所なれば、今ここに記さず。名乗紙は奉書の紙を四つに切り、また四つに畳中に聞きを書き付け、うえには名乗を書くべし。下皆これに准ずべし。

○蹴鞠香

香四種也 一包 二包 三包 四包
右の内各一包づつ試す物也
「客」一包 試す

右の香三炷ながら、聞き終りて包紙をひらき記録すべし。札なし。名乗紙を用いて聞くべし。「三夕の和歌」を以て組し香なり。本歌、

世に多くし(知)る所なれば、今ここに記さず。名乗紙は奉書の紙を四つに切り、また四つに畳中に聞きを書き付け、うえには名乗を書くべし。下皆これに准ずべし。

○蹴鞠香(しゅうきくこう)

香四種なり
「一」四包 「二」四包 「三」四包
右の内各一包づつ試に出す
「客」一包 試す

大試終りて出香十包いづれも打ちませ焚き
物と三炷しきほりて三度。しるべし
残一炷は「番直」や名付く一炷しき
なり一炷聞き當る度人形一問は
進む「客」は多少のかまもなく二問すむ
記録も二炷也若終りの番直も「客」
出くは當るも一問とみ長と一点
をさへ一問と三炷すてり内一炷も當る

ざるは「烏帽子」をぬがすべし。此の人かきねて
當るとも「扇」を持たせ、烏帽子を着る事
なし。十炷終りて勝たる方の「松」にても
「柳」にても鞠持ちの枝に「鞠」をかくるなり。人形は
初めより双方へ五人づつわかれならべ置くべ
し。人形くばり習いあり。
人形十人、「公家」は金の烏帽子、「地下」は黒
の烏帽子、「法師」は燕尾または頭巾なども
乃烏帽子は呼の燕尾又の頭巾なども

香道決り

紅

右、試み終りて出香十包いづれも打ちませ焚き
出す。三炷びらきにして三度にひらくべし。
残る一炷は「番直し(くつなおし)」と名付けて一炷びらき
なり。一炷聞き當る度に人形一問づつ
進む。「客」は多少のかまもなく二問すむ。
記録も二点なり。もし、終りの番直しに「客」
出でて聞き當るとも一問すすみ、点も一点
たるべし。相手三炷までの内一炷も當ら

ざるは「烏帽子」をぬがすべし。此の人かきねて
當るとも「扇」を持たせ、烏帽子を着る事
なし。十炷終りて勝たる方の「松」にても
「柳」にても鞠持ちの枝に「鞠」をかくるなり。人形は
初めより双方へ五人づつわかれならべ置くべ
し。人形くばり習いあり。
人形十人、「公家」は金の烏帽子、「地下」は黒
の烏帽子、「法師」は燕尾または頭巾なども

一興なりと。人形、「扇」を持ちて右の脇に指すを「笛さし」という。うしろに指すを「やなぐひさし」という。上のかたを右の方へかたぶけて指す。また左の手にも持つべし。記録は、「一」を「序」と記し、「二」を「破」と記し、「三」を「急」と記す。「客」は「ウ」と書くべし。これ「ウ」は「空(うつろ)」という心なり。三度にひらく度に記録すべし。

蹴鞠香之記 香組 一 たいまつ 二 わたし
三 辰の洞 ウ 神名
 三二二 一客三 一三二一
 白菊 急破破序ウ急序急破 直寸
 白糸 破 序ウ急 急 直六
 芙蓉 急 破序 急序急破 七
 紅葉 急破破序ウ序急 八
 年号月日

「蹴鞠香之記」

右盤ハ圖ニ委シ四本ノ樹ノ木ニ鞠ヲ付ケサシ
ワリ中ニ初メヨリ「梶ノ木」ニ鞠ヲ付ケサシ
置クベシ

異説ニ人形八人ニても、または四人ニても
聞きよう有り。同じ例なり。連中、人形
一つに二人づつわかれ、人形八つならば、
一つに壱人づつ八人して聞くべし。十人
の時は人形十なり。外にまた「源氏蹴鞠
ノ時ハ人形十なり。外にまた「源氏蹴鞠
一ツに壱人づつ八人して聞きよう有り
外ニ二人は、つらき人形八つならん
外中ノも同じ例なり。連中、人形
異説ニ人形八人ニても、または四人ニても

香わろ元相似て少しの違ひあり今ここに略し
る。連中貴人ハ軒下軒向たるべし

○鶯香

香四種ナリ
松と名付け 四包
竹と名付け 四包
梅と名付け 四包
右の内一包づつ試に出す
鶯と名付け 一包
右客なり試みなし

右、盤は図に委し。四本(よもと)の樹さし所、習い
あり。中に初めより「梶の木」に鞠を付けさし
置くべし。

異説に人形八人にも、または四人にても
聞きよう有り。同じ例なり。連中、人形
一つに二人づつわかれ、人形八つならば、
一つに壱人づつ八人して聞くべし。十人
の時は人形十なり。外にまた「源氏蹴鞠

香」あり。およそ相似て少しの違ひあり。今ここに略し
侍る。連中貴人は軒下、軒向たるべし。

○鶯香(うぐいすこう)

香四種ナリ
「松」と名付け 四包
「竹」と名付け 四包
「梅」と名付け 四包
右の内一包づつ試に出す
「鶯」と名付け 一包
右客なり 試みなし

右の香始より鶯の香ハの香打ちませ、残りを出香三炷過ぎて「鶯」の香打ちませ、残りを出香一炷びらきなり。「鶯」の香を聞き当れば、それかぎりにて終りなり。よつて三炷過ぎて残り六包の中へ「鶯」をませて聞く事なり。記録は当りばかりをしるす。札にて聞くべし。「鶯」始めより入る時は、早く出れば興なきゆえに三炷過ぎて後に入るなり。

「黄鶯(うぐいす)香之記」

黄鶯香之記 香組

松	らんざ
竹	柳花
杉	小松
鶯	玉琴

竹松杉梅竹松鶯
 柳花竹松 柳竹 鶯 五
 早蕨 松杉 竹 鶯 四
 吹竹 梅杉 松 三

右「鶯香」に異説あり。初めより鶯の香を

右「鶯香」に異説あり。初めより鶯の香を

合せ置きようの

一と一と 二と二と 客と客と

一と二と (一の upper 包に神と書付)

客と二と (客の upper 包に神と書付)

二と二と (二の upper 包に神と書付)

右の通り結び合せ認め置きて後、また打ちませい
づれよりなりとも焚き出すべし。二炷ひらき、二炷
め、二炷めに札筒をまわして札をひらき、記録

とべし。札の打ちようは

一と一とは 短歌の札打つべし

二と三とは 長歌の札打つべし

客と客とは 混本歌(こんほんか)の札打つべし

初一、後二は 折句の札打つべし

初二、後三は 誹諧歌の札打つべし

初客、後二は 旋頭歌の札打つべし

記録は、当りばかりを記す。もつとも一字づつ頭字

合せ置きようは

「一」と「一」と 「三」と「三」と 「客」と「客」と

「一」と「二」と (一の upper 包に「初」と書き付け、

二の upper 包に「後」と書き付け)

「客」と「二」と (客の upper 包に「初」と書き付け、

二の upper 包に「後」と書き付け)

「二」と「三」と (二の upper 包に「初」と書き付け、

三の upper 包に「後」と書き付け)

右の通りに結び合せ認め置きて後、また打ちませい
づれよりなりとも焚き出すべし。二炷ひらき、二炷
め、二炷めに札筒をまわして札をひらき、記録

すべし。札の打ちようは

一と一とは 「短歌」の札打つべし

二と三とは 「長歌」の札打つべし

客と客とは 「混本歌(こんほんか)の札打つべし

初一、後二は 「折句」の札打つべし

初二、後三は 「誹諧歌」の札打つべし

記録は、当りばかりを記す。もつとも一字づつ頭字

くくし書べし立物盤は圓に委し、松五本、
神五本、玉津嶋鳥井、瑞籬、住吉鳥井、
瑞籬、住吉方の松、玉津嶋方の神とわかれ
聞きしを「正当（しようとう）」と云う。一つ聞き一つ聞かざるは「半
當（はんとう）」と云う。正当は「松」にても「神」にても一間
づつ行く。半當は動かさず。記録には「住吉方」
は初の香当れば、かたよせて記録し、後の

香当れば記さず。「玉津嶋方」には後の香
をかたよせて記録し、初香は当れども記さ
ず。半當二つ有る時は、正当一つの数に入る
なり。盤の中に「鳥井」二つ立て、前住吉、後
「玉津嶋」とうしろ合せに立つべし。「松」、「神」の
下に「人々の札」一枚づつ置くべし。
（按ずるに金銀の短冊を
こしらえ、人々の紋の字を書き付けて樹に付け置くもよし）
初めより「松」、「神」立ておきて
四炷当れば「瑞籬」の際まで行く。五炷当れ

香

香道次第

玉籬の内へ入る。これを「初の勝」とす。六炷
 わらば「六儀に叶う」といふなり。一人間は三間
 行きの後、鳥井を出ずれば「後の勝」とす。こと
 ごとく終れば我方の花表(とりの)の左の方に
 立て「神木」とす。次の勝は右の方の神木
 とす。

右の香、昔は、香六種を以つて和歌六儀
 に表し、一種を二包づつにして十二包

二炷ひらきにて聞きし香なりと
 志野三郎右衛門宗信の古記に見え
 侍れども、中頃より右のごとく、香四種
 を以つて聞き初めしより、今世に用いる所は
 かくのごとしとなり。今また此の書、これに
 したがう、古来のごとくにて聞かんと思は
 人は香六種にて聞くべし。初心の人聞き
 分けがたきを以つて香数を減ずるものか。

香道次第

香道新不共中

六儀香之儀

香組

一 栴花
二 香松
三 星月夜
吐月

少 一 少 三 一 二
二 一 少 三 二 三

任古方十五頁

名案

白梅 旋 短 混 長 折 誦

名案

赤楊 短 少 長 誦

名案

紫菀 少 混 一

二 三 皆

早蕨 旋 一 混 三 折 誦 五

玉津島方十六

菱草 短 混 三 二 誦 四

縮松 旋 短 少 長 折 三 五

青竹 旋 一 混 二 誦 四

玉桂 短 少 折 三 三

年号月日

香道新不共中

〔六儀香の録〕

○星合香

香七種也

一種牽牛と名付 二包

一種織女と名付 二包

右の内一包は試に出す

五種も星と名付 五包

右は試なし

右試み終りて七種香打ちませ焚き出すべし。名乗紙を以つて聞くべし。試なき香は「星」といづれも書くべし。「牽牛」、「織女」の香は「牽」「織」と一字づつかくべし。記録も同じ。牽、織の二炷、一炷も当らざるを「大雨」と記録す。はじめあたり、後当らざるは「暁雨（あかつきのあめ）」と書くべし。初め当らず、後あたるは「宵雨（よいのあめ）」と書くべし。みなあたりたるは「星合（ほしあい）」とかくべし。

やいつまもひつべし牽牛織女
香ハ牽織ト一字づつかくべし記
録も同じ牽織ノ二炷一炷も
当らざるを大雨ト記録すはじめ
あたり後当らざるは暁雨（あかつきのあめ）と書くべし
初め当らず後あたるは宵雨（よいのあめ）と書く
べしみなあたりたるは星合（ほしあい）と
かくべし

○星合香（ほしあいこう）

香七種なり

一種「牽牛」と名付け 二包

一種「織女」と名付け 二包

右の内一包づつ試に出す

五種「あだ（仇）星」と名付け 五包

右は試なし

右試み終りて、七種香打ちませ焚き出すべし。名乗紙を以つて聞くべし。試なき香は「星」といづれも書くべし。「牽牛」、「織女」の香は「牽」「織」と一字づつかくべし。記録も同じ。牽、織の二炷、一炷も当らざるを「大雨」と記録す。はじめあたり、後当らざるは「暁雨（あかつきのあめ）」と書くべし。初め当らず、後あたるは「宵雨（よいのあめ）」と書くべし。みなあたりたるは「星合（ほしあい）」とかくべし。

星合香之記 香組 牽 歩松

名赤星 星牽星 星牽星 星牽星 星牽星
名赤星 星牽星 星牽星 星牽星 星牽星
名赤星 星牽星 星牽星 星牽星 星牽星

○闘雞香

香十種也

左 一 二 三 四 五 各二包づつ
右 一 二 三 四 五 各二包づつ

右の内一包づつ試に出す

右試み終りて、残り十包打ちませ、左右に別れて

聞べし。

左一「正四位上」と名付く 左二「正四位下」と名付く

左三「従四位上」と名付く 左四「従四位下」と名付く

左五「極臈」と名付く

〔星合香之記〕

○闘雞香(とうけいこう)

香十種なり

左 一「一」「二」「三」「四」「五」各二包づつ

右 一「一」「二」「三」「四」「五」各二包づつ

右の内一包づつ試に出す

右試み終りて、残り十包打ちませ、左右に別れて

聞くべし。

左一「正四位上」と名付く 左二「正四位下」と名付く

左三「従四位上」と名付く 左四「従四位下」と名付く

左五「極臈(きよくろう)」と名付く

右一 正五位上と名付く 右二 正五位下と名付く
 右三 従五位上と名付く 右四 従五位下と名付く
 右五 差次(さし)の蔵人と名付く
 右立物の「鶏」十羽(白五羽、黒五羽)なり。双方へわかれ
 溝を付けるなり。中に勝負の場あり。「勝」は
 相手の鶏を手前へ取るなり。「持」は相引きなり。一
 人聞きは三間、二人よりは一間、つつすすむ。香

終らずとも、盤は勝負付き次第終りなる。
 相手をわかち双方へわかれ聞くべし。札は表
 の紋、常のごとし。裏は右に記すごとく位
 階を書くべし。
 札は一炷びらきたるべし。記録は当り
 ばかりを記す。立物双方に「左近の桜」「右
 近の橘」を立つるもあり。此の香組十種な
 れば、初心の徒(ともがら)は紛乱(ふんらん)して聞き分けがた
 し。

香道抄

三三

よつて続編に新聞鶏香をあらわし、
其の品をあらため記すものなり。

「閩鶏香之記」

閩鶏香之記 香組 九 一 二 三 四 五
右 一 二 三 四 五

古 本 九 右 本 四 右 本 五 右 本 二 右 本 三 右 本 四 右 本 五

白雜方十九頁了

白雜 一 三 二 四 一 五 二 三 四 五 皆

法梅 一 三 二 四 一 二 三 四 五

白炭 三 二 一 三 二 一 三 二 一 五

白雜方二十

條松 一 三 四 五 三 二 五 六

彩竹 三 二 四 一 五 二 四 七

梧桐 一 三 二 一 三 五 七

年月月日

焼合花月香

香二種也

一 種「花」と名付 三包

二 種「月」と名付 三包

右の内一包づつ試み出す

右試み終りて出香四包を一度に二炷づつ
焚合せ出だすべし。二炷とも「花」と聞くは「花」の
札、二炷とも「月」と聞くは「月」の札、一炷は「月」
一炷は「花」と聞くは「嵐」の札を打つべし。札は

表の紋、常のごとし。裏に「月」、「花」、「嵐」と書くべ
し。一人分三枚、十人分三十枚なり。札は
折居に入れ置き、香終りて後、記録すべし。香
焚き様の法は「焼合十炷香」に同じ故に
秘事多し。委しくは、師伝あらざれば得
がたし。よつて今ここに悉くことごとく記さず。

焚合花月香記

香組 花 三枚
月 三枚

○ 焼合花月香(たきあわせかげつこう)

香二種なり

一種「花」と名付け 三包

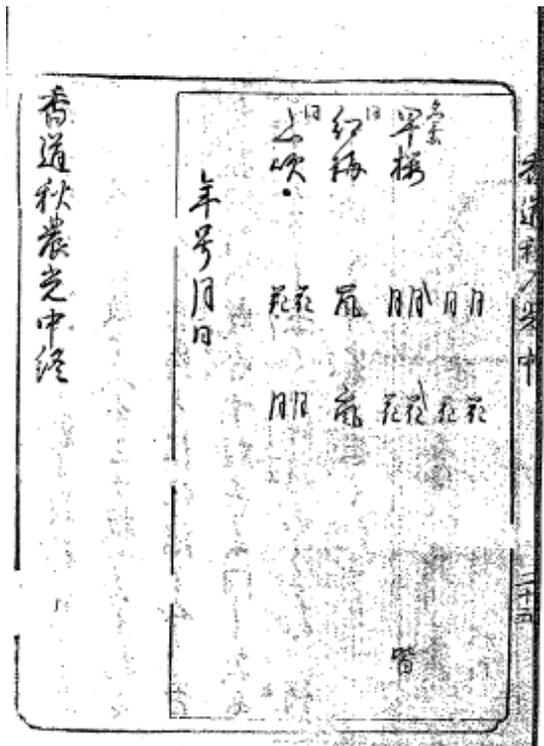
一種「月」と名付け 三包

右の内一包づつ試み出す

右試み終りて出香四包を一度に二炷づつ
焚合せ出だすべし。二炷とも「花」と聞くは「花」の
札、二炷とも「月」と聞くは「月」の札、一炷は「月」
一炷は「花」と聞くは「嵐」の札を打つべし。札は、

表の紋、常のごとし。裏に「月」、「花」、「嵐」と書くべ
し。一人分三枚、十人分三十枚なり。札は
折居に入れ置き、香終りて後、記録すべし。香
焚き様の法は「焼合十炷香」に同じ故に
秘事多し。委しくは、師伝あらざれば得
がたし。よつて今ここに悉くことごとく記さず。

【焚合花月香記】



香道秋農光中終り

【凡例】

- ① 句読点、「」、送り仮名等は適宜追記しました。
- ② 旧仮名使いを新仮名使いに適宜改めました。
- ③ 黒字の（）は、本文内に小文字で記された注記です。
- ④ 青字の（）は、筆者の補足です。
- ⑤ 赤字は、判読等に曖昧な点がある部分です。

令和二年二月

『香筵雅遊』國井和裕